

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：11101

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14060

研究課題名（和文）発達障害傾向を有する子どもの二次障害を緩和する心理社会的環境要因の解明

研究課題名（英文）Clarification of psychosocial environmental factors that mitigate secondary disabilities in children and adolescents with tendency toward developmental disorders

研究代表者

新川 広樹（Shinkawa, Hiroki）

弘前大学・教育学部・助教

研究者番号：10848295

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：(1) Child and Adolescent Social Support Scale (CASSS) の日本語版を作成し、小学3年生～中学3年生を1,068名を対象とした調査を実施した。尺度の構造的妥当性・構成概念妥当性を確認し、小中学生のソーシャル・サポートを包括的にアセスメント可能な尺度を整備した。
(2) 中学校4校25学級の1～3年生692名とその保護者のデータを階層線形モデルを用いて分析した結果、学級集団としての級友サポートの高さがASD特性と問題行動の関連を緩衝したことから、発達障害の二次障害を防ぐ上でサポート的な学級集団づくりの重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ソーシャル・サポートの心理的不適応に対する緩和・緩衝効果を検討した研究は、国内外において散見されるが、いずれの研究においても、ASD特性やADHD特性など発達障害に関連した特性や学級間差の要因は考慮されてこなかった。発達障害特性の個人差を考慮した上で、学級集団としてのソーシャル・サポートの緩衝効果を実証的に示した本研究は、わが国のインクルーシブ教育において、発達障害特性を有する子どもが過ごしやすい学校環境づくりを推進していくための根拠となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：(1) The Japanese version of the Child and Adolescent Social Support Scale (CASSS) was developed, and its structural and construct validity was confirmed by a survey of 1,068 students from third grade to ninth grade. The scale can be used to comprehensively assess social support among elementary and junior high school students.

(2) A hierarchical linear model was used to analyze the data of 692 students with first to third grades and their parents from 25 classes in four junior high schools. The results showed that the higher level of classmate support as a classroom level buffered the association between ASD trait and conduct behaviors. These findings suggest the importance of creating a supportive classroom group in preventing a secondary disability of developmental disorders.

研究分野：臨床心理学

キーワード：ソーシャル・サポート インクルーシブ教育 マルチレベル分析

1. 研究開始当初の背景

自閉スペクトラム症 (autism spectrum disorder: ASD) や注意欠如／多動症 (attention-deficit/hyperactivity disorder: ADHD) 等の発達障害特性を有する子どもはその主症状だけでなく、環境への不適応による情緒・行動的問題に発展するなど、二次障害を抱えやすいことが指摘されてきた (Kim et al., 2000; Ollendick et al., 2008)。これらの発達障害特性は、心理的不適応を直接的に予測するのではなく、学校生活に関連した否定的な経験を介在して二次的に不適応を増悪させると考えられている (齊藤, 2015)。特に、一日の大半を過ごす学級集団におけるサポートイブな関係性の有無は、子どもの適応状態に大きく関わってくると考えられる。

発達障害特性を有する子どもの二次障害を防ぐ上で重要と考えられる心理社会的環境要因として、「ソーシャル・サポート (social support)」がある。ソーシャル・サポートは道具的・対人的リソースを提供できる関係性を指し (Thompson, 1995)、抑うつ症状 (Slavin & Rainer, 1990)、心理的苦痛および情緒的問題 (Demaray et al., 2005) などの心理的適応状態と関連することや、社会経済的地位が学業成績に及ぼす影響を緩衝することが報告されている (Malecki & Demaray, 2006)。わが国でのインクルーシブ教育システム構築に向けた取り組みでも、学級集団で障害を受容するための雰囲気づくり・居場所づくりが強調されており (大塚他, 2018)、ソーシャル・サポートの個人差だけでなく、その学級間差に着目することの意義は大きい。

国内では既にソーシャル・サポートを測定する尺度がいくつか開発されているが、小中学生の子どもに共通して適用可能な尺度の不足が指摘され (村山他, 2016)、学級集団の特徴としてのソーシャル・サポートは考慮されていない。一方、海外における系統的な調査研究では、Child and Adolescent Social Support Scale (CASSS; Malecki et al., 2000) が多く利用されている (Rueger et al., 2010)。CASSS の特徴は、ソーシャル・サポートを保護者、教師、クラスメイト、親しい友人、学校の大人の 5 つの資源、情緒的、情動的、評価的、道具的の 4 つの種類という側面を分類して測定できることにある (Demaray & Malecki, 2003; Malecki & Demaray, 2006)。本邦においても CASSS の使用が可能となれば、特定の友人や家庭・学校の大人によるサポートと弁別した上で、学級内のクラスメイトから受けるサポートを扱うことが可能になると考えられる。

さらに、学級集団としてのソーシャル・サポートの効果を明らかにするためには、測定された変数を個人レベルと集団レベルの要因に分け、所属する集団の特徴によって個人の特性間の関連にどのような差異が生じるかについて、マルチレベル分析を用いて検討する必要がある。

2. 研究の目的

本研究では (1) CASSS (Malecki et al., 2000) の日本語版を作成・標準化し、子どものソーシャル・サポートの包括的なアセスメントを可能とすること、(2) 学級集団としてのソーシャル・サポートが発達障害特性と情緒・行動的問題との関連にどのような影響を及ぼすか (調整効果) を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

(1) CASSS の原版について、原著者の許諾を得た上で、Beaton et al. (2000) のガイドラインに沿って日本語に順翻訳した後、逆翻訳の確認手続きを経て日本語版を作成した。尺度の標準化のために、小学 3 年生～中学 3 年生を対象とした質問紙調査を実施し、1,068 名の有効回答を得た。妥当性検証のための比較尺度として、①Strengths and Difficulties Questionnaire 自己評定版 (SDQ; Matsuishi et al., 2008) と②Depression Self-Rating Scale for Children (DSRS-C; Murata et al., 1996) を用いた。統計解析として、構造的妥当性の検証のため、CASSS の 60 項目 (6 件法) について DWLS 推定法を用いたカテゴリカル因子分析を実施し、各因子モデルの適合度指標を比較した。構成概念妥当性の検証では、CASSS と比較尺度との Pearson の積率相関係数を算出し、事前設定した仮説の範囲との相関係数の一致性を確認した。

(2) 中学校 4 校 25 学級の 1～3 年生 692 名とその保護者を対象として調査を実施した。欠損データは分析ごとに除外した。質問紙は①CASSS (Shinkawa et al., 2023) の「級友 (クラスメイト) サポート」「家庭 (保護者) サポート」「学校 (の大人) サポート」、②Autism Spectrum Screening Questionnaire 親評定版 (ASSQ; 井伊他, 2003)、③ADHD Rating Scale 親評定版 (ADHD-RS; 市川・田中, 2008)、④SDQ 親評定版 (Matsuishi et al., 2008) の「情緒不安定」「問題行動」を使用した。統計解析に先立ち、級友サポートについて学級内類似性を確認した上で、学級ごとの平均値を「級友サポート (学級レベル)」として変数化した。マルチレベル分析では、情緒不安定と問題行動を目的変数、それ以外の指標を説明変数 (学年、級友サポート (学級平均) のみ学級レベル変数)、ASSQ×級友サポート (学級平均)、ADHD-RS×級友サポート (学級平均) をレベル間交互作用項、ASSQ と ADHD-RS を変数効果とした階層線形モデル (HLM) を用いた。

4. 研究成果

(1) 確認的因子分析を用いて5つのモデルの適合度指標を比較した結果、5因子モデル (CFI = 1.000, RMSEA = .007, SRMR = .034) と三次因子モデル (CFI = .994, RMSEA = .032, SRMR = .049) の両方が良好な適合度指標を示した。三次因子モデルでは、各項目と一次因子 (各4種類) との間に.62~.95、一次因子と二次因子 (5資源) の間に.82~.99、二次因子と三次因子 (一般因子) との間に.71~.91の因子負荷が認められた。各因子の信頼性係数は $\alpha = .76\sim.98$ を示した。

CASSSの5因子および全体合計得点と、SDQの各下位尺度との相関係数は、向社会的行動で $r = .38\sim.52$ 、情緒不安定で $r = -.12\sim-.22$ 、問題行動で $r = -.16\sim-.31$ 、多動・不注意で $r = -.22\sim-.34$ 、友人関係問題で $r = -.17\sim-.45$ 、総合困難度で $r = -.25\sim-.40$ 、DSRS-Cとの相関係数は $r = -.40\sim-.54$ であった (Table 1)。CASSSとSDQ、DSRS-Cとの相関係数は、事前に設定した仮説と89.6%一致した。上記の結果から、CASSS日本語版の構造的妥当性・構成概念妥当性が確認され、小中学生のソーシャル・サポートを包括的にアセスメント可能な尺度を整備することができた。

Table 1 CASSSと各比較尺度との相関係数

	CASSS					
	保護者	教師	級友	親友	学校	合計
SDQ						
向社会的行動	.38 **	.39 **	.50 **	.46 **	.42 **	.52 **
情緒不安定	-.16 **	-.12 **	-.22 **	-.20 **	-.19 **	-.21 **
問題行動	-.19 **	-.16 **	-.31 **	-.23 **	-.19 **	-.26 **
多動・不注意	-.26 **	-.22 **	-.34 **	-.29 **	-.27 **	-.33 **
友人関係問題	-.17 **	-.21 **	-.45 **	-.40 **	-.28 **	-.37 **
総合困難度	-.27 **	-.25 **	-.44 **	-.38 **	-.32 **	-.40 **
DSRS-C	-.44 **	-.40 **	-.52 **	-.48 **	-.45 **	-.54 **

Note. 太字は仮説と一致した係数を示す。

(2) 階層線形モデル (HLM) による分析の結果、問題行動に対して学級レベルの級友サポートの効果が認められた (Table 2)。レベル間交互作用を検討した結果、ASSQ×級友サポート (学級レベル) の交互作用が認められた。単純傾斜分析の結果から、学級集団としての級友サポートの高さは、ASD特性と問題行動の関連を緩衝することが明らかとなり (Figure)、発達障害の二次障害を防ぐ上でサポートティブな学級集団づくりの重要性が示唆された。

Table 2 HLMによる各レベル要因の効果

固定効果	情緒不安定	問題行動
	推定値	推定値
切片	3.754 **	1.731 ***
生徒レベル		
性別	.783 *	.014
ASSQ	.091 **	.028
ADHD-RS	.088 ***	.127 **
家庭サポート	-.005	-.013 *
学校サポート	.011	.009
級友サポート	-.017 *	-.002
学級レベル		
学年	-.125	-.049
級友サポート	-.037	-.043 **
レベル間交互作用		
ASSQ×級友サポート	—	-.013 **
ADHD-RS×級友サポート	—	.006
変量効果	分散	分散
切片	.050 *	.010
ASSQ	.009 ***	<.001
ADHD-RS	.001	<.001
残差	2.368	1.504

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

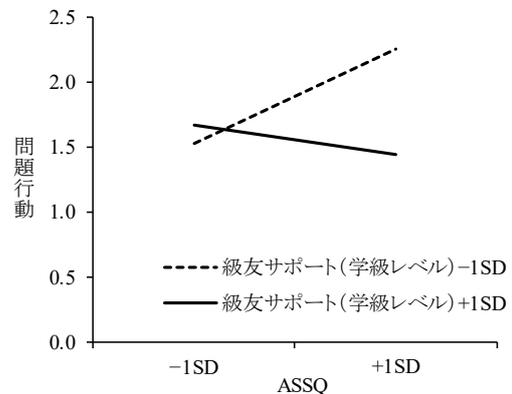


Figure ASSQと問題行動との関連における級友サポートの学級間差による調整効果

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 12件）

1. 著者名 本田真大・新川広樹	4. 巻 71
2. 論文標題 児童青年版援助要請認知尺度，援助要請スキル尺度の開発 COSMINに基づくPROM開発研究及び内容的妥当性研究	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 173-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/jjep.71.173	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Irie, T., Shinkawa, H., Tanaka, M., & Yokomitsu, K.	4. 巻 42
2. 論文標題 Online-gaming and mental health: Loot boxes and in-game purchases are related to problematic online gaming and depression in adolescents	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Current Psychology	6. 最初と最後の頁 20515-20526
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/s12144-022-03157-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Kubo, T., Masuyama, A., Shinkawa, H., & Sugawara, D.	4. 巻 27
2. 論文標題 Impact of a single school-based intervention for COVID-19 on improving mental health among Japanese children	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Clinical Child Psychology and Psychiatry	6. 最初と最後の頁 813-823
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/13591045221094392	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 Masuyama, A., Kubo, T., Shinkawa, H., & Sugawara, D.	4. 巻 10
2. 論文標題 The roles of trait and process resilience in relation of BIS/BAS and depressive symptoms among adolescents	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 PeerJ	6. 最初と最後の頁 e13687
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.7717/peerj.13687	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Shinkawa, H., Takahashi, M., Adachi, M., Murayama, Y., Yasuda, S., Malecki, C. K., & Nakamura, K.	4. 巻 65
2. 論文標題 Psychometric validation of the Japanese version of the Child and Adolescent Social Support Scale (CASSS) in early adolescents	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Japanese Psychological Research	6. 最初と最後の頁 145-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/jpr.12375	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Shinkawa, H., Irie, T., Tanaka, M., & Yokomitsu, K.	4. 巻 12
2. 論文標題 Psychosocial adjustment and mental distress associated with in-game purchases among Japanese junior high school students	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 708801
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2021.708801	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Adachi, M., Takahashi, M., Shinkawa, H., Mori, H., Nishimura, T., & Nakamura, K.	4. 巻 57
2. 論文標題 Longitudinal association between smartphone ownership and depression among schoolchildren under COVID-19 pandemic	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Social Psychiatry and Psychiatric Epidemiology	6. 最初と最後の頁 239-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s00127-021-02196-5	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新川広樹・清水理奈・粥川智恵・冨家直明	4. 巻 16(1)
2. 論文標題 高等支援学校における集団ソーシャルスキル・トレーニングの実践 学校コミュニティの文脈への適合を目指して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ストレスマネジメント研究	6. 最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.50904/sutomane.16.1_12	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 新川広樹・粥川智恵・清水理奈・富家直明	4. 巻 16(2)
2. 論文標題 震災後の学校再開時における高等支援学校生のストレス反応 震災後1週間から4週間までの推移	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ストレスマネジメント研究	6. 最初と最後の頁 12-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.50904/sutomane.16.2_12	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masuyama, A., Shinkawa, H., & Kubo, T.	4. 巻 20
2. 論文標題 Validation and psychometric properties of the Japanese version of the Fear of COVID-19 Scale among adolescents	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Mental Health and Addiction	6. 最初と最後の頁 387-397
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s11469-020-00368-z	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Adachi, M., Takahashi, M., Hirota, T., Shinkawa, H., Mori, H., Saito, T., & Nakamura, K.	4. 巻 74
2. 論文標題 Distributional patterns of item responses and total scores of the Patient Health Questionnaire for Adolescents in a general population sample of adolescents in Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Psychiatry and Clinical Neurosciences	6. 最初と最後の頁 628-629
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/pcn.13148	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計17件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 新川広樹
2. 発表標題 学校ベースのメンタルヘルス調査におけるフィードバックの活用
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会第64回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新川広樹・本田真大
2. 発表標題 児童青年版援助要請スキル尺度の構成概念妥当性の検証
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第49回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 本田真大・新川広樹
2. 発表標題 児童青年版援助要請認知尺度の構成概念妥当性の検証
3. 学会等名 日本認知・行動療法学会第49回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新川広樹・本田真大・冨家直明
2. 発表標題 中学生のソーシャルスキルが抑うつ症状に及ぼす影響 ソーシャルサポートを媒介要因とした縦断的検討
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第55回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 北村優月・新川広樹
2. 発表標題 援助要請スタイルが友人サポートと抑うつに関連に及ぼす影響 友人との親密度を考慮した検討
3. 学会等名 日本ストレスマネジメント学会第21回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 三原ひとみ・新川広樹
2. 発表標題 小学生のソーシャルサポートが内在化/外在化問題に及ぼす影響 保護者と教師のサポートの交互作用の観点から
3. 学会等名 日本ストレスマネジメント学会第21回大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 新川広樹
2. 発表標題 学校におけるソーシャルスキル・トレーニングを成功に導くには？ アセスメントと般化の観点から
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第54回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本田真大, 新川広樹
2. 発表標題 児童青年版援助要請スキル尺度の開発（1） PROM開発研究
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第54回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 新川広樹, 本田真大
2. 発表標題 児童青年版援助要請スキル尺度の開発（2） 内容的妥当性の検証
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第54回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 ゲーマーのこころを理解するための心理学研究アップデート
2. 発表標題 横光健吾, 山本晃輔, 田中勝則, 曾我千亜紀, 入江智也, 新川広樹
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 本田真大, 新川広樹
2. 発表標題 児童青年版援助要請認知尺度の開発(1) PROM開発研究
3. 学会等名 日本認知・行動療学会第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 新川広樹, 本田真大
2. 発表標題 児童青年版援助要請認知尺度の開発(2) 内容的妥当性の検証
3. 学会等名 日本認知・行動療学会第48回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 嶋田洋徳・小関俊祐・野村和孝・三井梓実・西原希里子・田中茉優・杉山智風・新川広樹・三村尚志・菅野 純
2. 発表標題 教育現場における認知行動療法の実践的活用における最近の展開
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 足立匡基・高橋芳雄・新川広樹・森 裕幸・大里絢子
2. 発表標題 大規模コホート調査に基づく子どもの抑うつ症状の把握と発達のトラジェクトリー 自殺を含むこころの健康問題の予防体制の構築を目指して
3. 学会等名 日本教育心理学会第63回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横光健吾・入江智也・山本晃輔・田中勝則・新川広樹・岩野卓・曾我千亜紀
2. 発表標題 ゲームの心理学：熱中、モチベーション、嗜癡、eスポーツ
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 新川広樹・清水理奈・冨家直明
2. 発表標題 インターネットゲーム依存を呈する青年の認知的傾向およびストレス反応
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森裕幸・足立匡基・高橋芳雄・新川広樹・中村和彦
2. 発表標題 個人・学校レベルのソーシャル・キャピタルが小中学生の抑うつに与える効果 マルチレベル分析による検討
3. 学会等名 日本児童青年精神医学会第61回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	Department of Psychology	Northern Illinois University		
米国	Department of Psychiatry	Langley Porter Psychiatric Institute	University of California San Francisco	